

ホームページ『子育て広場』についての報告 1

開設の目的と構成の枠組み

発達科学研究教育センター 高嶋真知子

発達科学研究教育センター 品川玲子

The first report on the Website “Kosodate Hiroba” The purpose of establishment and framework of composition

Center of Developmental Education And Research Takashima, Machiko

Center of Developmental Education And Research Shinagawa, Reiko

2001年8月,(財)発達科学研究教育センターのホームページの一部として『子育て広場』が開設された。ホームページの目的として,(1)子育て支援に関わる専門家を対象に,インターネットを通して,子育てに関する現在の状況と問題を明らかにすること,(2)理論と実践の両面から必要な情報を提供し,支援のあり方を模索し,将来へ向けて提案を行っていくこと,という2点を目指している。このホームページが対象としている子育て支援の専門家といわれる人たちとは,具体的に保育士,幼稚園教諭,小学校教師,教育相談員,民間教育関係者,児童福祉施設職員,子ども家庭支援センター職員,児童館職員,心理学や教育学系の専門学校生,大学生,大学院生,研究者,教育ジャーナリストなどを想定している。また,提供される情報の内容は,発達心理学および臨床心理学的見地に主眼をおき,妊娠時から未就学児の問題,初期教育,子育て支援,教育現場での問題を,国内ばかりでなく広く国際比較の視野に立ち,専門性の高い内容を取り扱う。その一方,ホームページの特性としての,誰にでも簡単に届く情報手段のメリットを考え合わせて,誰にでもわかるやさしい表現による適切な内容を編集において心がける必要がある。以上のようなホームページを開設するにあたって検討された目的・対象・内容・手段について,決定するに至った経過を報告する。それによって,ホームページの現在のあり方を明確にし,将来の展望と課題として,今後ホームページにおいて扱われるべき問題について統括する。

【キー・ワード】子育て支援,インターネット,子育て支援専門家

"Kosodate Hiroba -Child-rearing Plaza-" was established as a part of the website of Center of Developmental Education and Research in August, 2001. The purpose was 1) to clarify the present situation and issues of child-rearing through the internet device aiming the specialists of this field, and 2) to provide both theoretical and practical information, seek for the better support system and to make a proposal. The "specialists" in this case are kindergarten teachers,

elementary schoolteachers, educational counselors, personnel in private sector involved in education, child welfare institution personnel, child home support center personnel, children's hall personnel, professional school students of psychology/pedagogy major, college students, graduate school students, researchers, the education journalists, and etc. The contents of the website are written from the view points of developmental and clinical psychology, dealing with the issues of various child problems from pregnancy to preschooler, initial education, child-rearing support, and school matters. The information given here is as academic as possible, based on not only domain issues but also containing international comparison studies with genuine internationalism. The editors are working to keep the wordings of the contents as plain and simple as possible, for websites are one of the information sources which can be easily accessed and should be understood by everyone. The carefully considered purpose, objects, contents, and the means of this website will be discussed in the following paper. This report will clarify the present state of this website and summarize the issues which should be dealt with as a future perspective and theme.

【Key Words】 Child-rearing support, Internet devices, Child-rearing specialists

1. ホームページ『子育て広場』開設の背景にある問題と開設の目的

～子育てとその支援が今問題になっている～

最近しばしば、新聞やテレビにおいて子育ての苦勞とそれをどのように支援するか、という問題が取り上げられるようになってきた。どうやら従来の子育てのあり方では、解決できない問題があちらこちらで起きているようだ。

たとえば、心理相談員として長年従事してきた臨床心理士からこんな報告を聞いた。自治体主催の母親講座で話をした後、質疑応答あるいは、自由に相談する時間になると必ず、と言っていいほど、涙ながらに自分の子育ての閉塞感を訴える母親に会う。その日の講演を聞いて初めて、自分の悩みがひとりだけのことではなかったことに気づき、解放されたと訴えてくるのである。

また、筆者の体験では研究のため観察を依頼して保育園や幼稚園を訪問すると、年少から年長までのクラスに必ずひとり以上の行動に問題のある子どもがいることに気づく。そして、保育に関わっている担当者から、この子どもの問題をどう捉えるか、また、その子どもとその親にどのように対応したらよいか、という質問を受けることになる。思い返すと、十数年前にもやはり一つの園にひとりふたり問題を持つ子どもがいたようであったが、当時はどうしたらよいかという質問よりは、このように解決しつつあるがそれでよいかの確認が主だったように思う。

第1の例では、子育ての真っ最中である親たちに、あるいはその子どもたちにひとりでは乗り越え難い問題が起こっていること、また第2の例では、問題を抱える親子の周囲にいる人びとにとっても、これまでの常識では解決不可能な状態が生じているらしいことが推測される。いったい最近の私たちの子育ては、どうなっているのだろうか。

日本社会の行政サイドからの子育て支援に対する政策は、1989年の「1.59ショック」を契機として少子化という問題が浮上してきたことによると考えられる（藤松，2001）。これは、厚生省（当時）の調査による「合計特殊出生率」といわれるもので、ひとりの女性が一生のうちに何人子どもを産むかの予測指数として考えられているものである。今日の先進諸国においては、人口置換水準（現在の総人口を維持する水準）を2.08に設定している。一般に出生率が人口置換水準を下回る状態が続くことは、やがてその国民の生産年齢人口の減少をもたらす。そのことは、経済成長の低下をもたらし、若年人口層にとっては、社会保障費の負担や高齢者の介護負担が重くのしかかる事態を招くことになる。これが、人口構造の転換によってもたらされる「少子化社会」における最大の不安として語られてきた内容であろう。厚生省（当時）は1993年から「エンゼルプラン」に代表される子育て支援政策を打ち出していくことになり、現在も改定が加えられながら社会福祉政策の大きな柱として模索が続いている。

しかし、柏木（2001a; 2001b）の指摘にもあるように、産業においては情報化が進み、高学歴化のなかで必要な労働力の質にも変化がもたらされ、医療・保健・福祉の向上を背景に新生児の死亡率が格段に低下した現代において上記のような少子化社会の不安の必要性を、それ自体問い直してみる必要があるのではないか。こうした現象を当然の歴史的变化として捉えなおしたとき、最初の例で指摘したように子育てが難しくなっている、あるいは、子育て以前の出産さえも選択しえる時代に来ている現在の日本で、若い世代の人々が子どもを産まない、あるいは育てることに困難を感じている、このことはいったいどういうことなのかを、もう一度原点に立って考えてみる必要があるのではないか。

いったい我々の周りで何が起きているのか。現実の状態はそれぞれの持つ問題意識や解決に向かうための捉え方によって、同じできごとでもいろいろな角度から検討が可能である。そこで、このホームページの第1の目的として、子育てに関する現在の状況と問題を明らかにすることを考えた。

現実になにが起こっているか、それをしっかり見極めていくことは重要な作業である。しかし、同時に事例の積み重ねだけでは捉え損なってしまうであろう問題の本質への深い考察を、常に怠らないことも重要である。そのためには、現実をどのような枠組みで捉えれば、問題の本質により良く迫ることができるのかを念頭におきながら、考察をすすめることが必要である。

第2の目的として、提示された問題の適切な対応策を探し出すことが挙げられる。現在の子育てとその支援の問題の背後には、時代の価値観や地球環境そのものが、大きな曲がり角に来ていることが挙げられるかもしれない。その意味では、子育てとその支援を自明のこととしてきたこと、それ自体を問い直し、それによって新たな問題の枠組みを提供しながら現代の子育て事情を明らかにしていく場を作り出す必要が出てくるかもしれない。

ホームページ『子育て広場』（2003年3月現在）の「藤永保コーナー」「生涯学習と子育て：子育て支援の意味を考える」において、藤永は子育て支援をどのような人間の欲求に頼って推進していくのか、発達理論の基礎にまで掘り下げて問題を提起している。また、その対応策としても、膏藥張りのような短期的な対応に終わるのではなく、中期的、長期的にわたる対応策をだれが行っていくか、

それによってどうやって問題を解決に導くかを見極める必要を説いている。

子育て支援の原点に戻って問題を見直すときには、ただ日本社会で生じている問題に焦点をあてているだけでは、子育て全体の視点を失うおそれがある。その意味では、広く世界の子育てとその支援にも眼を向ける必要がある。また、進化的な生物としての子育ての歴史にまでも視野を広げていく必要もあるだろう。

ひとつの例として、現在日本社会の行き詰った核家族の子育てからの開放策としては、社会で子どもを育てるという発想がある。それは、古くは日本の農業社会の中にもみられたし、また近年ではカナダのトロントでの子育て支援が具体例として報告されている（小出，1999）。

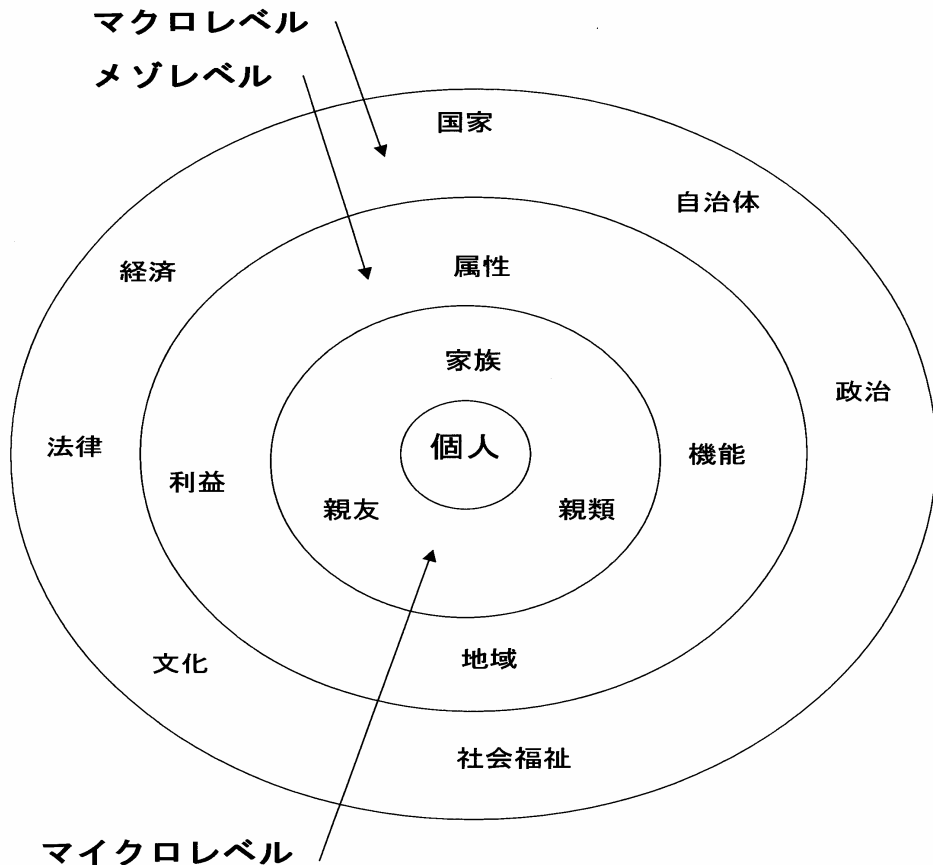


Figure 1 社会的関係のレベル：エコロジカル・ソーシャル・システム

【出典】 武田信子（2002）『社会で子どもを育てる：子育て支援都市トロントの発想』平凡社

社会で子どもを育てるというための概念的枠組みとしては、子育て支援のソーシャルワーカーである武田（2002）のエコロジカル・ソーシャル・システムが興味深い。従来の日本において専門職に携わる人々、たとえば、医師・法律家・教師・臨床心理士・保育士・保健師・社会福祉士などは、その専門の分野で対応すべき親子に関わってきた。しかし、それぞれの専門分野の調整や連携に関わる仕事は、各専門家の副次的仕事として考えられ、全体的に調整や連携されないまま、問題が据え置かれてきたのではないかと考えられている。ソーシャルワーカーの仕事は、まさにその調整や連携を専門とする仕事であり、ソーシャルワーカーはひとつの問題の解決にあたる時に、常に全体をどのようにコーディネートするかが重要な視点となる。そのためには、個人の問題は3つのレベルに取り囲まれて生じていること、それぞれのレベルから眺めるとどんな問題の様相がみえてくるか、という概念図を念頭におくことがソーシャルワーカーによる支援にとって必要である、と述べられている。

Figure 1 は、武田（2002）によるエコロジカル・ソーシャル・システムにおける社会関係のレベルの概念図である。エコロジカル・ソーシャル・システムにおける3つの支援レベルとは、個人を取り巻くマイクロレベル、メゾレベル、マクロレベルと呼ばれ、機能と役割からなる。マイクロレベルは、家族、親類、友人のように個人的な関係であり、直接的に個人に働きかける。たとえば「イライラする母親」としての個人を例に取ると、子どもや夫、親、舅姑などが、マイクロレベルに属する人々で、その人々との直接的な出来事がイライラの原因になっていると考えるならば、その関係の適応のために支援をおこなう。精神医療の対象として身体的状態への働きかけもマイクロレベルに含まれている。

メゾレベルは、直接的に個人に関わる関係よりも一回り大きなレベルを含んでいる。コミュニティと呼ばれる、同じ価値観や共通の属性を持った共同体によって関係を形成しあっているレベルである。この場合のコミュニティは、共通の機能を目的に集まった集団を意味し、地理的な意味が強い日本的「地域」とどまらない。メゾレベルの例は、保育士や教師、会社や地域の趣味仲間までいろいろである。たとえば、日本におけるメゾレベルにおける支援の例としては、共通の地域に住む親たちのイライラを解消するために、自治体の子育て講演会のような支援活動を始めるとを含む。

さらに、マクロレベルの支援とは、国家・政治・経済・法律・文化などに問題を見出すことによって、さらに問題解決の視野が広げられていく。たとえば、母親のイライラは社会的に不利な状況にあるからだと判断した場合に、居住地の地域開発や母親の権利擁護などに分析を広げて、社会変革にいたる計画をたて、実行していくレベルである。実際に、政治家を動かすロピストとして活躍するカナダのソーシャルワーカーの例が挙げられている。

ホームページの第2の目的である「どのような支援が必要か」という問題にあたっては、上記のような常に全体を見通すための概念モデルが必要なのではないかと考える。問題を客観視するための枠組みを通して実態を明確にし、その本質への問いかけをおこない、支援の枠組みを通して全体を眺望し、解決の道を探ることが、ホームページの目的になった。上述の目的を実現する場として、ホームページの名称を『子育て広場』と決定した。

『子育て広場』という名称は、さまざまな分野の人々が集まってくる場という意味を込めて考案された。「子育て」という言葉については、そもそも子どもは育つのか、それとも育てられるのか、とい

う議論がある。この問いに対する答えはどちらも事実であるだろう。人間の発達には自ら育つ面と、育てられる面との両面によって成り立っている。どちらが欠けても、この社会に適応的な発達はのぞめない。本稿で「子育て」という言葉を用いるときには、その両方の意味を含めて使用することにした。

次に、広場に集まってくるさまざまな分野の人々とは、具体的にどのような人を想定して内容を構成するかについて述べる。

2. 対象 誰に向かって発信するか

～親に直接ではなく、子どもと親の関係に働きかける専門家～

『子育て広場』は、分野を超えて子育てに関心のあるさまざまな人々が集まってくる場を提供する。その目的は、ホームページを通して、現状を見据え、その本質を見極めること、さらに現状の問題に対して、どのような支援が考案できるかを旨とする。このためには、分析的であると同時に全体を見る視点が必要である。では、こうした情報をだれに向けて発信するか。可能性は2つある。第1は、問題を抱えている子どもや親たちに、第2は、親子の関係にかかわる専門家に向けてである。

まず、第1の問題を抱える親と子どもに向けての発信の可能性を検討した。この場合、現実の問題を多く集め、その具体的解決案を交換する場を提供することになる。実際、インターネットで検索をすると、さまざまな問題を抱える子どもと親の会のホームページが何千と列挙される。その内容は具体的で多岐にわたり、中には非常に良質のホームページも見出すことができる。では、実際に『子育て広場』においてこうした問題を扱うとすればどうなるだろうか。膨大な関心をすべて網羅するには、実際のスタッフや時間の制約を考えると難しかった。しかも問題が拡散して、本質を見極めることはさらに難しい。

次に、第2の可能性である親子の関係にかかわる専門家を対象にすることのメリットについて検討した。すでに、第1章においてソーシャルサポートの3つのレベルについて述べたが、マイクロレベルとマクロレベルとの中間にあるメゾレベルに属する人々に働きかけることは、私たちのホームページの目的と一致する。おそらく子育て支援の専門家は、マイクロレベルにおける問題についても、またマクロレベルで論じられる問題に対しても、両方に目を向けて、メゾレベルにおいて重要な役割を果たしている、あるいは果たすことが望まれている人々である。また、ホームページの対象として考えた場合、直接の親子支援を対象とした場合と比較すると、まだ開発されていない分野であることもおぼろげながら見えてきた。

それゆえ、『子育て広場』は子育て支援の専門家を対象にする。現在のところ子育て支援の専門家とは、具体的には保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・教育相談員・民間教育関係者・児童福祉施設職員・子ども家庭支援センター職員・児童館職員・心理学や教育学系の専門学校生・大学生・大学院生・研究者・教育ジャーナリストなどを想定している。今後、医療関係には関連リンクとして拡大できないかと考えている。

次に、子育て支援の専門職に対してどのような内容の情報を提供するかについて検討し、ホームページの構成の枠組みとして第3章にまとめた。

3. 内容と枠組み

～どのような内容をどのような枠組みで発信するか～

『子育て広場』に携わる各スタッフの専門領域に関連して、臨床心理学・コミュニティ心理学・発達心理学・比較文化的視点を4つの柱として、それぞれの領域における現状の問題、その本質的分析、問題への支援や解決への試みなどを展開していくように構成を考えた。具体的には以下に述べる8つの枠組みによって構成されている。

求められる育児支援

臨床的視点からの提言を扱う（養育者と子どもの関係、社会的支援の問題点など）

子育て支援専門職の現場から

コミュニティにおける子育て支援専門家による現場報告を扱う。

実践者からの将来に向けての提言も展開する。

保育・教育現場レポート

保育園・幼稚園・小学校・幼児教育関係者による現場報告を扱う。

実際に子どもや親たちに接している専門家に対するインタビューによって、何が問題になっているかを具体例によって提示する。

ホームページ開設以前に、すでに発達科学研究教育センターのスタッフによって準備されてきた活動との連携としてこのコーナーを設けたが、さらに内容の充実を図りたい。

子どもの発達

発達の視点からの提言を扱う（子どもの発達に加えて、子育てを通してのおとなたちの発達を含んでいる）

現場で使える発達のおはなし

専門用語を現場向けにわかりやすく解説するなど、理論を実践に結び付けることを試みる。

海外子育て事情

文化を超えての子育て支援の現状報告と紹介を扱う。

「発達科学・子育てアドバイザー」レポート

発達科学研究教育センターの新事業として注目される子育て支援者へ向けての実際的働きかけの報告を扱う。

発達科学研究教育センターに関わる研究者からの提言

初年度の試みとして「藤永保コーナー」を開設し、子育て理論をめぐる討論を展開した。次年度は「柏木恵子コーナー」を開設する。今後はさらにコーナーを増設し、テーマの多様化を図る予定である。

以上の8枠組みのほかに、スタッフ紹介・リンク集を掲載している。今後の課題として、これらの内容を充実していくことを目指している。次に、インターネットという手段によって情報を伝達するときの特長について考え、何ができるかについて検討した。

4. 手段 どのような方法が可能であるか

～インターネットの利用による新しいネットワーク作り～

インターネットの普及は日々拡大しつつあり、その可能性もさまざまである。「いつでも、だれでも、どこでも」が、新しいメディアを通して可能になりつつある。内閣府経済社会研究所の2002年3月における主要耐久消費財等の普及率調査によると、パーソナルコンピュータの普及率は全世帯の57.2%に及んだ。一昨年38.6%、昨年50.1%と増加の結果である。同調査においてカラーテレビは99.3%でほぼ全世帯に普及していることがわかる。パーソナルコンピュータと似たような普及率の消費財としてCDプレイヤー60.5%、ステレオ54.9%がある。このコンピュータ使用世帯から、さらにインターネットを利用している人を推測すると普及率は下がるが、最近では携帯電話でインターネットにつなぐ方法もあり、(ちなみに、携帯電話の方は同調査で78.6%の普及率である)どこにでも携帯できることで、ますます可能性が広がっている。

この簡易な情報伝達手段にのせて、子育て支援専門職に携わる人々を対象に、適切な情報を送り出すことによって、さらにどんなことが可能か。また、どんな注意が必要か。実はこのテーマについては、まだ模索中である。情報の送り手としては、対象を限定し、内容の枠組みを構成したが、「だれでも」という可能性から、まず内容についてプライバシーを侵害するなどの倫理的問題はないかを確認し、次に表現についてできるだけやさしい表現を用いることを心がけている。また、ディスプレイの構造から、従来の本を読む認知過程とは、異なる理解の過程があるのではないかということも検討されている。たとえば、主題と結論を示してから議論に入るスタイルや、画面ごとに内容がわかるような小見出しを入れることなど。この点については、プログラムの専門を手がけているスタッフが検討を重ねているので、別の機会に報告をまとめたいと考えている。

また、インターネットの利点として、相互作用的關係作りが可能であることが挙げられる。一般的にはメールによる相互通信がまず挙げられる。また、説得力のあるデータを収集するための調査や実際にインターネット上で議論を重ねて理論構築を行うなど、どのような実際的な方法が可能であるか、検討を加えて実行していく。

5. 今後の展望と課題

2001年8月にホームページ『子育て広場』が開設されるまでに、水面下で多くの議論や試みがなされてきた。本稿において報告されたことはその一部分にすぎないが、子育て支援が注目されている今、現状と問題を深く掘り下げ、新しい支援のあり方について、理論から問い直していくことを、子育て支援にかかわる専門家を対象に、インターネットによって実践するための枠組みを提案した。最後に、今後の課題について簡単にまとめた。

内容の充実

各コーナーの内容の充実を図るために、以下の事柄が計画されている。たとえば、各地で始まっている統合保育の実際的問題として、発達障害に関する問題を取り上げる必要がある。また、「発達科学・子育てアドバイザー」への訪問インタビューや研究者コーナーにおいてテーマの多様化を計画している。すでに継続課題であるインターネット検索の方法として、『子育て広場』に関心を

寄せる専門家にとって適切な内容と信頼性のあるリンク集を構成するにはどうしたらよいかを模索していく。

調査実施計画

インターネットを手段とする相互的情報伝達を実現するための方法として、調査実施を計画している。それを通して、だれが何を必要としているかを『子育て広場』に関心を寄せてくれる人々を通して探ること、その結果であるデータを通して、子育て支援の現状の問題点をより明確にすることが可能になる。

ネットワーク作り

ネットワーク作りの第一歩として、インターネット上における理論討論の可能性を探ることを計画している。具体的には、「藤永保コーナー」で取り上げた子育て理論をめぐって、Q&A形式のコーナーを考案している。将来的に、特定の関係者にむけてメール・マガジン配布が可能になるような組織作りを固める。

以上の3点のほかに、全体として調査に協力してくださった個人情報の保護、およびインターネット上での意見交換時の倫理的問題などをどのように解決して、相互に快適なコミュニケーションを図るかが今後の課題である。

引用文献

藤松素子. (2001). 「子育て支援」政策の現状と課題. *教育と医学* 11月号. 12-21.

柏木恵子. (2001). *子どもという価値：少子化時代の女性の心理*. 中公新書 1588. 東京：中央公論新社.

柏木恵子. (2001). *子育て支援を考える：変わる家族の時代に*. 岩波ブックレット No.555. 東京：岩波書店.

小出まみ. (1999). *地域から生まれる支えあいの子育て*. 東京：ひとなる書房.

武田信子. (2002). *社会で子どもを育てる：子育て支援都市トロントの発想*. 東京：平凡社.

<謝 辞>

本稿作成にあたりご指導いただきました、お茶の水女子大学名誉教授、また本財団の業務理事でもある藤永保先生に深く感謝いたします。

ホームページ開設におけるスタッフの一人として、臨床心理士の立場から多くの提言をくださり、梓組み構成にご尽力くださいました小田原恵さんに心から感謝申し上げます。

<付 記>

本稿において紹介されたホームページ『子育て広場』は、2003年3月31日現在 <http://www.coder.or.jp/kosodate/index.htm> に掲載されている。